

お米の海

みなさんは「お米の海」という言葉を知っていますか。お米の稲には、朝つゆがつき、そのつゆが、太陽の光に照らされると、キラキラと輝きます。さらに、そこに稲の穂を揺らす風が吹いてくると、サラサラと音をたて、つゆのしずくがキラリと光りながらすべり落ちます。

僕は、その眺めを「お米の海」と呼んでいます。その中を一メートル三十八センチと、中学三年生としては決して大きな方ではない僕が歩くと、揺れる稲の中が、まるで海の中にいるように感じます。そして、その海の中を学校に行っていると「さあ、今日も頑張るぞ」と何となく勇気がわいてきます。

なぜ、勇気がわいてくるかと考えてみると、その海は、僕の父が育てた海だからじゃないかと思うからです。

その美しい稲穂の海も、初めは土と水だけのただの水溜まりなのです。

みなさんは農業をやったことがありますか。農業を経験したことのある人は、よく分かると思うのですが、例えば、稲刈りなどは、暑くて下着の中まで汗がグラグラ流れ落ち、腰は痛くなるしきついし：一度経験すると、二度としたくないと思うのです。

事実、僕もそう思っていました。しかし、いやだと思っても、家を継がなくてはなりません。そうになると当然、家と同時に農業も継がなくてはなりません。そのために僕は、少しずつでも農業になれるために、父について手伝いを始めました。

まずは、種まきです。種まきは苗箱の中に練った土を平に入れ種をまきます。その種が芽を出すまで一生懸命世話をし、やっと田植え機で苗を植えるのですが、そこまででも、かなり根気のいる大変さです。さらに、田植えときたら、今は機械で楽なように見えますが、どうしても機械ではできない部分がかなり出てきます。そこは、どうしても自分たちの手で植えなければなりません。機械で植える場合も、ぬかるみ、くさい田んぼの中で一時間もやっていると、もうクタクタになってしまいます。田植えが済んだ後も、稲の周りの草をこまめに取ったり、病気にならないように気を配ったりしなければなりません。

僕は、こんな農業のどこが楽しいんだろうというも疑問に思っていました。しかし、僕たちを食べさせてくれている父や母に、その疑問をぶつける勇気は僕にはありませんでした。しかし、自分が将来この仕事をしなければならぬと考え始めた時、勇気を持って、父に「農業ってたのしか？」と尋ねてみました。すると、父は「楽しいか事ばかりじゃなかけど秋になった

ら米ば作ってよかったって思うったい」と意味ありげに母の顔を見ながら笑うのでした。母も父の顔を見て笑っていました。

僕には何の事か分からずにいましたが、自分が植えた苗は、いつも気になってしかたありませんでした。あんなに苦勞し、つらい思いをして植えた苗です。枯れたり、病気になっては大変です。父や母とは比べものにはなりません、僕は僕なりに、日曜日や時間に余ゆうのある時は、こまめに草を取ってやりました。

そして、稲が金色に輝く季節になりました。その時僕は、いつもの年とはなんだか違う不思議な気持ちになっていて自分自身に気が付きました。その気持ちとは、毎年見なれている田んぼの風景が、今年は違うように思えてしかたなかったんです。その風景とは、最初にお話した、「お米の稲に、朝つゆがつき、そのつゆが、太陽の光に照らされると、キラキラと輝き、さらに、そこに稲の穂を揺らす風が吹いてくると、サラサラと音をたて、つゆのしずくがキラリと光りながらすべり落ちる」そんな風景です。

どうしてだろう、僕は考えました。その時「農業ってたのしか？」と質問した時の父や母の答え、「楽しいか事ばかりじゃなかけど秋になったら米ば作ってよかったって思うったい」と

言った意味ありげな答えを思い出しました。僕は思いました。「つらいから楽しい」「作物の育つ喜び…」作物を育てるのは楽ではありません。田植えから稲刈りまでとても大変な仕事が続きます。だからこそ、作物が育つのが嬉しいのです。楽しいのです。

僕は今年中学校を卒業します。卒業後は農業高校へ進学し専門的な農業経営の勉強をしたいと思っています。そして、これまで以上の「お米の海」を育てることができる、そんな人間になりたいと思っています。

その年の稲刈りは、いつもの年と同じ様にきつかったですが、いつもとは違ったなんともいえない充実感が残りました。

今年も田植えの季節がきました。今年は父や母と協力して昨年の「お米の海」以上のすばらしい「お米の海」を作ろうと思っています。